

米国大統領外遊先遣アドバイザー
元米国国務省米国儀典局オフィサー

シントロン大久保泉

ロジ面から大統領の外遊をサポート 先遣隊前乗り二週間の攻防

——大久保さんは、トランプ大統領の外遊先遣アドバイザーを務められています。

大久保 二〇一七年一月、トランプ大統領の初来日に際して、広報チームの一員として、メラニア夫人のプログラムを担当したことがきっかけになりました。私の前職は国務省儀典局で、国務長官のゲストである各国要人のもてなし、国際会議での大統領レセプション、大統領や国務長官の外交イベントのロジやコーディネートなどを担当していたので、そこでの仕事を評価してくれた人がいたのだ



しんとろん おおくぼ いずみ 愛知県出身。ボストン大学大学院ジャーナリズム修士号修了。NHKワシントン支局・NY総局勤務を経て、フリーランスの海外取材コーディネーター。国務省勤務の夫に伴い、2002年よりマニラ、北京、東京に赴任。東京ではG8洞爺湖サミットに関わる。10年から米国国務省の儀典局勤務。現在は、大統領の外遊先遣チームのアドバイザーとして活躍。写真は昨年5月日本訪問時のトランプ大統領夫妻と大久保氏。

と思います。当時は同じ国務省でティラソン長官外遊時の広報を担当する課長職にありましたが、トランプ大統領の初めての日本訪問ということで、光栄にもサポートすることになりました。

何度も交渉を重ね、相互に折り合いをつける

——その後二〇一九年五月、トランプ大統領の二度目の来日時は、ホワイトハウスの広報部門の一員に加わりました。大久保 そのとき私は、夫の二度目の東京赴任に同行して

国務省は休職（事実上の退職）の身でしたが、ホワイトハウスの「イズミが日本にいるならサポートしてもらおう」ということになったようです。この時もメラニア夫人に付きました。大相撲観戦も大変でしたが、令和初の国賓として宮中行事がありましたので、かなり神経を使いました。

翌六月には、同じく日本が舞台となったG20大阪サミットがあり、今度は大統領の広報チームに加わりました。大阪が終わればこの仕事は一段落と思っていたところ、引き続き声をかけてもらい、日本以外で開催される外交イベント——八月の仏ビアリッツでのG7サミット、中止になった一一月のチリでのAPEC、直近では二〇年二月のインド訪問にも先遣スタッフとして加わりました。約二週間前に訪問国に入り、先方の担当者と外交イベントなどロジの詳細を詰め、いざ大統領が訪問すれば、同行して行事の円滑な進行に努めることになります。

——外遊ごとにチームがつくられるのですね。

大久保 そうですね。広報官を中心に、コアになる報道・広報担当スタッフはもちろん常駐していますが、私の場合には外遊の都度、外部から加わる形です。

——前乗りの二週間で、何をするのですか。

大久保 現地の大使館と協力しながら、最初の一週間は、

視察を中心に先方の状況を観察し、同時に交渉相手の性格やスタイルを理解するように心がけています。交渉にはお国柄がよく表れます。日本の場合、こちらの要求に対して「ちよつと難しいですね」から入ることが多いですね（笑）。それでも一週間くらい押し問答していると、本当にダメなことと、逆にこちらがどうしてもお願いしたいこととの折り合いがついてきます。いったん受け入れたことは、必ず約束を守ってくれるので、その点で日本とは信頼関係を築きやすかったです。

——仕事上、どのようなことに留意しましたか。

大久保 相手国やスタッフ間のやりとりは細心の注意を払いますが、もうひとつ、自国のメディアとの関係も重要です。ホワイトハウスには大統領外遊に同行する報道関係者が一七人前後いて、その人たちの信頼を勝ち得ないと、せっかくの外交イベントも台無しになりかねません。ロジ面でもどうしても希望に添えないことがある場合は、理由と交渉経緯をきちんと説明します。できないことをきちんと説明することは、信頼関係をつくる上では大切ですね。

自分のバックグラウンドを活かす

——そもそも米国に行かれた理由は？

大久保 もともと英語に関心があり米国留学を志しまし

たが、両親に相談すると、「遊び半分の語学研修ではなく、どうせ行くなら大学院に」と言われました。一生懸命勉強して、ボストン大学大学院ジャーナリズム専攻に合格できるときは、本当に嬉しかったです。

——そこで学んだことを活かし、報道の世界に入ります。

大久保 実は大学院でペーパーを書く必要に迫られ、無謀にもNHKとABCの比較を試みました。そこでNHKのワシントン支局に電話をすると、幸運なことに当時支局の政治担当記者だった手嶋龍一さんが対応してくださり、それが縁となって、インターンを経て、一九九二年に正式にNHKワシントン支局に現地採用されました。

——その時に結婚をされたのですか。

大久保 そうです。大学院時代に出会って、彼はジェトロの現地採用、その後民間企業を経て、国務省に入りました。私はNHKニューヨーク総局に移り、ドキュメンタリー制作に関わりながら、結婚し、双子の息子を出産しました。そして、ベビーシッターを雇い、すぐに仕事に復帰しました。ドキュメンタリー番組の制作にやりがいを感じましたし、夫もどんな仕事をなさいというスタンスで、その点は波長が合いましたね。

——結婚後はご主人の海外赴任に同行されます。

大久保 マニラ、北京、東京と続きます。北京では、米国大使館の広報スタッフとなり、初めて米国政府の仕事に就きました。その後の東京では、ちょうど二〇〇八年のG8北海道洞爺湖サミットの時期で、ホワイトハウスのロジ担当として、東京で外務省との交渉したのも貴重な経験です。

——その後、再びワシントンに戻り、今度は国務省で儀典の仕事に就かれます。

大久保 ちょうどワシントンに戻るタイミングで、国務省長官室の儀典のポストに空きが出て、採用されました。一〇年一〇月のことです。仕事は儀典の中でもセレモニアルと呼ばれるもので、食事会やレセプションなどイベントの全てをコーディネートする立場にありました。

——仕える長官によって、雰囲気もやり方も違うのではないですか。

大久保 だいぶ違いますね。私が入省したときの長官は、ヒラリー・クリントン氏でした。ファーストレディとして豊富な経験があり、スタッフもその時からの付き合いの人が多く、ホワイトハウスの華々しい外交文化をそのまま持ち込んだような感じでした。要人のおもてなしも、コンセプトから細部に至るまで気を使い、側近の儀典長と何度も

やりとりして作り上げていました。

国務省に入って驚いたことは、考えれば当然のことですが、周りが米国人ばかりなことです（笑）。もちろん私は結婚を機に米国籍となっていますが、それまでの職場はNHKも大使館も、日本人を含め多くの外国人が働く職場でした。ところが国務省は、まさにアメリカの真ん中という感じで、それが逆に日本という私のバックグラウンドを強く意識することになりました。

考えてみれば、儀典はいろいろな国の要人を迎えるので、スタッフのバックグラウンドが多様なことは悪いことではありません。私としても、時に「日本」的な感覚をアメリカ流のおもてなしにどう溶け込ませるかを考えるのは、楽しい経験でした。実はそれまで、名刺の名前を「Izumi Cinton」と表記していたのですが、自分のバックグラウンドを知ってもらうことが組織の役に立つと思い、「Izumi Okubo-Cinton」に直しました。

——ケリー長官の四年間はいかがでしたか。

大久保 ケリー長官で最も印象に残っているのは、一六年四月、広島でのG7外相会合に同行したときのことです。ホスト役を務める広島出身の岸田外相の案内で、各国外相は、広島平和記念資料館を訪れ、その後原爆死没者慰霊碑

へ献花しました。予定ではそこから帰路につくはずが、献花を終えたケリーさんが少し先にある原爆ドームを指さして、隣の岸田さんに何か話しかけているのが見えました。

私はその瞬間「これは（原爆ドームに）行くぞ」と思いました。そして隣にいたセキュリティ担当に「長官はドームに行くよ、走ったほうがいいよ！」と言葉をかけたのを覚えています。果たしてケリー長官はドームに向かうことを提案したようで、岸田外相の案内で足を運ぶことになったのです。セキュリティ担当も予定外の事態に対応すべく、全力疾走でそちらに向かっていきました。

ケリーさんは長く上院議員を務めた外交通で、気持ちが強くて暖かい人なので、岸田さんの思いを聞くうちに、自分の目で見たい、いま行くべきだ、と判断したのだと思います。私としても、胸が熱くなる出来事でした。

——最後に、若い読者にメッセージをお願いします。

大久保 何事においても、自分が「やりたい」と思う気持ちを信じて、チャレンジしてほしいと思います。好きなことであれば努力できるし、その過程で苦労や失敗も受け入れられます。私の場合、チャレンジを続けるなかで道が開けてきたという面が少なくありません。やりたいことがあるのなら、ぜひチャレンジしてみてください。●